

「風は吹いている」

県立神戸高等学校長
新谷 浩一

○ 思いを「言葉」や「振る舞い」にできたなら…

過日、深澤先生にお願いして図書室の書架に飾っていただいた『冬と瓦礫』という書物は、本校 40 回生の砂原浩太郎さんがお書きになった作品です。時代小説の作家として定評があり、これまでに山本周五郎賞を受賞したほか、直木賞の候補になったこともある砂原さんですが、この作品は一転、阪神・淡路大震災を主題としてお書きになられたものです。

震災当時はすでに東京に拠点を構えておられた砂原さん。それでも震災の後には直ちに帰郷し、ご家族を親戚のもとに避難させることにご尽力されたそうです。そして今、「震災を直接体験しなかった自分にも語りたいことはある」との思いから、この書をお書きになられたとのこと。東京での神戸高校同窓会で砂原さんとお会いし、お話を聞いた私は、後輩となる皆さんのためにサイン入り著書をプレゼントしていただくこととなりました。

経験しなかったことを理由に、「自分に震災を語る資格はない」などと思う必要はありません。被害が軽かったことを理由に、被害の重かった人に負い目を感じる必要もありません。私自身、被害が軽かった方の1人だと知っただけで、語り続けてきましたし、先々月も皆さんに語らせていただきました。多くを失った方にしか語れない苦しみがあるように、その場にいなかった方にしか語れない苦しみもあることを砂原さんは教えてくれます。ひとつの真理ですね。

卒業式前日の予餞会、卒業生を代表しての「後輩への言葉」では矢部航資くんが言葉の力を見せつけてくれました。学校説明会で出会った先輩に憧れ、本校への入学を決めたという矢部くん。在学中も「あの先輩のように後輩に何かを与えられる存在になりたい」との一心で高校生活を送っていた、とのことでした。私は4月の新入生歓迎登山での彼との出会いを思い出しました。世話係として参加してくれた彼の、後輩に対する言葉と姿勢があまりに凛々しいため、私はつい「君は凄いな」と彼に声かけをしてしまったのです。



憧れの先輩から受け継いだ「神高生であることに価値はない。神高生として何をやるかに価値がある」との言葉を護り、その価値を追い求めたのですね。「これが真の神高生か」そう思い知らされた私です。

また、卒業証書授与式で答辞をよみあげた高山輝莉さんも立派でした。御両親への感謝を口にし、さんざん涙を流し、途中で何度も言葉に詰まりながらも、そのまっすぐな言葉と姿勢は崩れることはありませんでした。「言葉」よし、「振る舞い」よしであれば他には何も要らないですね。

かくして 78 回生の卒業式は終わりました。彼らは宝塚階段を降り、入学以来はじめて正面玄関を通り抜けたあとと應援團と吹奏楽部、そして保護者の方々に作られた花道を通り抜けていきました。「鳳雛」だった彼らが3年という歳月で立派な成長を遂げ、晴れて「鵬」となり広い世界に羽搏いていったのです。

一方、新たなドラマも幕を開けました。今週木曜の学力検査には 81 回生という新たな「鳳雛」をめざして、募集定員を遥かに上回る中学生が地獄坂を登ってきます。こんなに大勢が集まるのは先ずもって学校説明会等での生徒諸君の言葉と振る舞いのお蔭です。追い風、吹かしてくれて有り難う。4月からが実に楽しみです。

さらに、今月末に埼玉で開催される「全国高等学校選抜ラグビーフットボール大会」の出場校に「本校が選ばれた」との知らせ。出場できるのは全国で 32 校のみです。おめでとうございます。支えてくださった方々への感謝と創部以来 99 年を繋いでくれた先輩方への感謝とともに、神高生らしさ、見せつけてください。

